

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 12 月 17 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22592615

研究課題名（和文） グループ回想法実践能力尺度の開発

研究課題名（英文） The development of a Scale for Rating the Skills to Provide Group Reminiscence Therapy

研究代表者 内野 聖子 (UCHINO SEIKO)

国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：00348096

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、1)施設を利用している認知症高齢者を対象にしたグループ回想法を実施した者の回想法実践能力を捉えられる尺度（観察式、質問式）を開発する、2)開発した回想法実践能力尺度の信頼性および妥当性を検証することである。

グループ回想法実践能力尺度は27項目であり、質問式尺度としての信頼性および妥当性、観察式尺度としても一定の信頼性が検証された。

グループ回想法実践能力尺度を活用することで、質の高いグループ回想法の実践、高齢者ケアの質の向上に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：

The present study was conducted to: 1) develop a scale (including observation and questions) to assess the ability of a person implementing the retrospective method for the elderly with dementia attending or living in nursing care facilities, and 2) examine the reliability and validity of the developed scale.

The scale, designed to determine a person's skills and ability to implement the retrospective method, consisted of 27 items. Its reliability and validity were established both as a questionnaire- and observation-based scale.

The scale for assessing the ability to implement the retrospective method is considered to contribute to the effective implementation of the method and improve the quality of elderly care services.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	100,000	30,000	130,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：老年看護学

1. 研究開始当初の背景

我が国の高齢化率は2007年では21.5%、2055年には40.5%に達することが予測されており、また、90歳未満の年齢階級では年齢の上昇とともに要介護3～5の者の割合が高くなっていく傾向にある。よって、年々、我が国では高齢化とともに、種々の問題が浮き彫りとなっている。特に、認知症への対応が問題になっている。現状として、要介護者のうち、施設在在者で認知症（認知症高齢者の日常生活自立度判定基準によるランクⅢ以上）のある者の割合は半数を占めている。さらに、認知症の重症化に伴うBPSDの妄想、幻覚、異常行動が増加している。また、虐待されている高齢者の8割に認知症があることが報告されている。

認知症高齢者への取り組みの一つとして、回想法や音楽療法等の非薬物療法が行われている。回想法は1960年初頭にR. N. Butlerにより提唱された⁷⁾。この手法は治療的意義が示されており、認知症の有無にかかわらず幅広い対象に実施されている。回想法はリアリティーオリエンテーション等の類似する非薬物療法と比較され、それらの違いが明確になりつつある。地域におけるグループ回想法の実施状況は、介護予防や閉じこもり予防を目的として行われている。高齢者福祉施設では、業務の過酷さや賃金の安さなどから、バーンアウトや職員の離職が問題となっている。それらを解決する術を探索する中で、回想法に参加したケアスタッフは、仕事の意欲が増す、個別の高齢者に即したケアプランのための基礎的情報が得られるなどと言われていることから、研究者は回想法に着目している。

また、回想法に全8回の内、半数の4回以上参加することによって、バーンアウトの軽減効果があるという回想法に参加したケアスタッフの効果についての研究報告がある。さらに、認知症高齢者へのケアにおける対応困難度が軽減したという研究報告があり、ケア能力の向上があったのではないかと予測される。

2. 研究の目的

本研究では、以下の2点を目的としている。
(1)施設を利用している認知症高齢者を対象にしたグループ回想法を実施した者の回想法実践能力を捉えられる尺度（観察式、質問式）を開発する。
(2)開発した回想法実践能力尺度の信頼性および妥当性を検討する。

3. 研究の方法

＜グループ回想法実践能力尺度の開発＞

(1)対象者：回想法実践者、認知症高齢者

(2)実施場所：

関東圏内高齢者福祉施設の一室

(3)実施内容（調査・分析方法）：

①グループ回想法を実施する。その際、対象者に許可を得た上で録画・録音を実施する。

②グループ回想法実施後に、実施場面における実践者の高齢者への関わり方について観察調査をする。

③グループ回想法実践能力尺度を開発する（観察式、質問紙式）。

④観察調査した結果から回想法実践能力尺度の項目選定およびリッカート尺度の設定を検討する。

<グループ回想法実践能力尺度の信頼性と妥当性の検証>

(1)対象者：回想法実践者

(2)実施場所：

①観察式の回想法実践能力尺度の信頼性を検討するため、録画したグループ回想法実施場面の観察調査は関東圏内高齢者福祉施設の一室で実施する。

②質問式の回想法実践能力尺度の信頼性および妥当性を検討するため、アンケート調査は郵送式で実施する。

(3)実施内容（調査・分析方法）：

①ケンドール一致係数（観察者間一致率）を算出することによって信頼性を検討する（観察式尺度）。

②アンケート調査を実施する（質問式尺度）。

1. クロンバック α 係数を算出することによって、信頼性を検討する。

2. 自律性尺度、コーピング尺度、バーンアウト尺度結果と比較することによって妥当性を検討する。

4. 研究成果

<グループ回想法実践能力尺度開発>

本研究では、グループ回想法場面を録画し、それを観察調査した結果および回想法に関する文献を参考にしながら尺度開発を試みた。質問式尺度の信頼性と妥当性を検証するために質問紙調査を実施し、観察式尺度の信頼性検証のために観察調査結果について2人以上の調査者の一致率を検討した。

主因子法およびプロマックス法で因子分析を行い、二重付加であった項目や因子負荷量が0.4以下の項目を削除した結果、最終的に、グループ回想法実践能力尺度は27項目となった。

以下は開発されたグループ回想法実践能力尺度である。

(1) 高齢者が思い出せるように高齢者の言ったことを繰り返して言うことができた

(2) 高齢者の快感情をうながすように高齢者の言ったことを繰り返すことができた

(3) 高齢者の快感情をうながすようなポイントに着眼することができた

(4) 高齢者が思い出せるように他の参加者からの言葉を伝えることができた

(5) 親近感を示すことができた（握手など）

(6) 高齢者が戸惑わないように円滑に終了をすることができた

(7) 高齢者が戸惑わないように円滑に準備し、参加高齢者を迎え入れることができた

(8) 参加高齢者全員がグループの一員として参加できるよう配慮しながら回想法を進行することができた

(9) 高齢者の話しを相手の身になって聴くことができた

(10) 高齢者が展開について行けるように対応することができた

(11) 高齢者の難聴・理解力低下などの機能低下に対応することができた

(12) 高齢者の記憶力低下に対応することができた

(13) 高齢者が言えなかったことを代弁することができた

(14) 高齢者が思い出せるように具体的に質問することができた

(15) 途中参加者・途中退場者へ配慮することができた

(16) ジェスチャーを用いて高齢者に分かりやすく情報を伝達することができた

(17) 高齢者が思い出せるように道具を活用することができた

(18) 季節感を大切にすることができた

(19) 高齢者の要望に応じて実現可能な計画を提案することができた（散歩など）

(20)モデリング（デモンストレーション）を行うことができた

(21)（高齢者の自尊心を高めるように）他の参加者からの言葉を伝えることができた

(22)家族を大切に思っていることを受け止めることができた

(23)高齢者が苦勞してきたことを受け止めることができた

(24)いま、回想法の場で展開されている話題・ことを伝えることができた

(25)高齢者が集中力を高められるようにすることができた

(26)回想法の場で待っている高齢者に配慮することができた

(27)参加者同士をつなげることができた

<グループ回想法実践能力尺度開発の信頼性と妥当性>（質問式尺度）

質問式尺度としてのグループ回想法実践能力尺度（27項目）のクロンバック α 係数0.949であった。また、妥当性については、自律性尺度の下位尺度である認知能力・実践能力・具体的判断能力・抽象的判断能力との相関係数は0.302~0.583であり、コーピング尺度の積極的な問題解決とは0.319、バーンアウト尺度の情緒的消耗感・脱人格化とは-0.367・-0.377であり、バーンアウトの個人的達成感とは0.315であり、いずれも有意であった。

質問式尺度としての一定の信頼性と妥当性が検証されたと考える。質問式尺度は、グループ回想法実施者が活用して自らの回想法実践を振り返ることによって、回想法の質をさらに高めていくことに貢献できると考える。

<グループ回想法実践能力尺度開発の信頼性と妥当性>（観察式尺度）

観察式尺度としての信頼性はケンドール一致係数0.227~0.342であり、いずれも有意であった。

観察式尺度としての一定の信頼性と妥当性が検証されたと考える。観察式尺度は、施設管理者などが活用することによって教育的な関わりに貢献できると考える。それとともに、回想法実施者がお互いに客観的に実践内容を評価し合うことで、回想法の質をさらに高めていくことにつながると考える。

さらに、質問式尺度と観察式尺度を組み合わせることで、回想法の質を高めることに加えて、高齢者への関わり方や高齢者理解が改善されるのであれば高齢者ケアの質の向上にも貢献すると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 内野聖子、浅川典子、橋本志麻子、三好理恵：グループ回想法を実施したケアスタッフへ的高齢者ケア実践における効果，日本認知症ケア学会誌，10(1)，68-78，2011.

2. 内野聖子、浅川典子、橋本志麻子、三好理恵：実施者が発揮しているグループ回想法実践能力，日本認知症ケア学会誌，11(2)，551-562，2012.

〔学会発表〕（計5件）

1. 内野聖子、浅川典子、橋本志麻子：グループ回想法場面で発揮された実施者の実践能力，日本認知症ケア学会誌，No12-2，第14回 日本認知症ケア学会プログラム・抄録集，2013（福岡）.

2. 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理恵,
薬袋淳子, 相内恵津子: グループ回想法にお
いて認知症高齢者を支える実践者の関わり,
第 32 回日本看護科学学会, 466, 2012 (東京).

3. 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理
恵: 認知症高齢者が参加するグループ回想法
展開に必要な実施者の関わり 回想法実施
場面の観察調査結果から, 日本老年看護学会
第 17 回学術集会, 183, 2012, (石川).

4. 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理
恵: グループ回想法実践場面において実施者
が発揮している力, 日本老年看護学会 第 16
回学術集会, 2011 (東京).

5. 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理
恵: 高齢者に効果的なグループ回想法におけ
る実践者の関わり, 第 31 回日本看護科学学
会講演集, 2011 (高知).

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内野 聖子 (UCHINO SEIKO)

国際医療福祉大学・小田原保健医療学部・
准教授

研究者番号: 00348096

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

浅川 典子 (ASAKAWA NORIKO)

研究者番号: 00310251

埼玉医科大学・保健医療学部・准教授

橋本 志麻子 (HASHIMOTO SHIMAKO)

研究者番号: 50433892

埼玉医科大学・保健医療学部・助教

三好 理恵 (MIYOSHI RIE)

研究者番号: 00438863

埼玉医科大学・保健医療学部・助手